



CONFIDENCES

BY ROBERTO GIOBBI

翻訳：平賀義達

（訳注：この本には7つのカードのルーティンがありますが、それらの間に「カップアンドボール序曲」など、性格の異なる4つの章がはさまっています。そこでこの解説書では、読みやすいように原本の各章の順番を筆者の独断で並べ替えて、まずはじめにルーティンをまとめていることをまずお断りしておきます。

前半の7つのルーティンはセルフワーキングあり、特殊な道具を使うものあり、と変化に富んだ個性的なトリックです。お楽しみいただけると幸いです。

後半は、4つの「エッセイ的な解説」です。主なものは「THOUGHTS ON CONTROL」と「ON ERDNASE」です。前者では「客のカードの選択と返却の自由度のバランス」など示唆に富んだ考察といくつかのカードコントロールを紹介しています。後者は、近代カードスライトの最初の解説書である

「EXPERT AT THE CARD TABLE」とその著者 Erdnase についての考察です。ただ、出来るだけ訳注は付けましたが、同書を読んでいないと理解出来ない部分が多く、また取り上げる技法もとても難しいものが多いです。

したがって、興味のない方はこの章をとばしていただいても結構です。ただ、訳者としてはざっとでも読んでいただき、同書の世界の雰囲気だけでも味わっていただきたいと思います。なぜなら、現代のカードスライトのほとんどは、そのルーツがこの125年前の本にあるからです)

はじめに

私は多くを語りたい人間なのですが、ここでは私の最も短い序文を書くことにチャレンジしたいと思います。と言うのも、私の過去の本の序文について（長いと）批判する人もいたからです。私のようにいろいろな本のすべての序文を読む人間、ときには序文しか読まない人間からすると考えられないのですが、世の中には序文などは読まない人もいます。序文は美しくも有益な1つの分野でさえあると思いますし、ドイツの哲学者 Kierkegaard などは序文だけの本さえ書いています。素敵な試みですね。ただこの本は性格が違いますし、皆さんはもう内容を読みたくてうずうずしていることだと思います。私の序文もここで止めにします。この本が楽しい読み物であり、また役に立つものでありますように！

（訳注：原本の「はじめに」の頁の左側の頁には「一筆書き」で書かれたピエロの像があります。実は GIOBBI の「はじめに」の文章も、日本語ではいくつにも分かれていますが、実際には切れ目のない1つの文章で書かれています。遊び心を発揮したのだと思います）

THE DECK OF MISSED OPPORTUNITIES

このトリックのアイデアは、1970年に販売された、Fred Lowe と Paul Marcus によるトリック「CHRISTENED REVERSE」に基づいています。また、Ali Bongo もそれを発展させた「FRED」というトリックを考えて、Fred Lowe 本人にも見せたと言っていました。さらに、Dave Campbell はそれまでに使われていた「ROUGH And SMOOTH」原理を使わない方法を1976年に発表しました。それ以来、多くのヴァリエーションが考案されて来ましたが、私も多くのヴァリエーションを考えて来ました。

20年ほど前にドイツの Nuremberg 在住のアマチュア Carlhorst Meier と話している時に、彼が「THE DECK OF MISSED OPPORTUNITIES」（機会を逸したデッキ）という謎めいた魅力的なタイトルを考えたのだが、まだトリック自体を思い浮かばない、という愉快な話をしていました。私はそれから10年以上経ってから、頭の中にずっとあったそのタイトルを「FRED」トリックと結び付けました。そしてそれは、観客もマジシャンも、私をも楽しませることになったのです。1990年に Jeff McBride

がスイスに来た時に、私はこれを彼に見せましたが、「今まで見た中で一番素敵なトリックの1つだ」と言って、私を喜ばせてくれました。

以下の解説は、初めて印刷物として発表したものです。

(現象)

マジシャンは彼に宛てた一通の封筒を取り出します。また、デッキを取り出し、それが「機会を逸したデッキ」だと言います。客の1人に好きなプレイングカードの名前を1枚言ってもらいます。マジシャンは、実は各カードの後ろには、マジックと何らかのつながりのある有名人の名前が書かれている、と説明します。客が自由に言ったカードの裏には「Einstein」(アインシュタイン)と書かれています。封筒を開けてみると、中には Einstein が書いた手紙が入っているのです！

(訳注；(やり方)に説明があるのですが、「このデッキの各カードの裏には GIOBBI がこのトリックを見せたいと思った人達の名前が書かれているのだが、既に亡くなっている人達であり、このトリックを見せる機会を失ってしまったのだ」という訳で、「機会を逸したデッキ」という名前がついています)

(準備)

—以下省略—

(やり方)

—以下省略—

TALLY-HO

私の知る限りでは、4枚の同一カードを取り出すのにカードケースを使ったのは、かの Henry Christ (1903~1972) です。彼のやり方は「数理原理」を使うものでやり方としては興味深いものでしたが、客にとってはディーリングプロセスが長たらしく感じられるものでした。Harry Lorayne は 1971年の彼の本で、彼のヴァリエーションを発表しました。多くのマジシャンがヴァリエーションを発表しましたが、その中でも Harry のヴァリエーションは一般客に受けるもので、この現象を有名にしました。

以下のヴァージョンは友人のフランス人 Richard Vollmer が考案したものに私のアイデアを加えたもので、私のレパートリーになっているものです。このハンドリングには FARO シャフルを使いますが、そ

れを聞いて読むのを止めないでください。デッキを正確に2等分する必要もありませんし、すべてのカードを完全に FARO シャフルする必要もありません。この本を読んでいるような人なら、すぐに出来るようになるでしょう。

(現象)

4枚の A がデッキの中に入れられますが、カードケースがそれらを見つけ出す指示を与えてくれます—しかし1枚だけミスしますが、それもマジカルに修正されるのです。

(準備)

—以下省略—

(やり方)

—以下省略—

GUARANTEED !

これは小粒なトリック、Ascanio が「マイナーワーク」と呼ぶ類のトリックですが、一般客とマジシャンを共に魅了し不思議がらせるカードマジックの要素を持ったものです。と言うと、「小粒」、「マイナーワーク」と言った表現と反するようなものに思われるかもしれませんが、その意味を説明しましょう。

コース料理を考えてください。おそらく5, 6品、皿の上の料理の量が少なければさらに何品かの料理が出るかもしれません。これらのうち、「メイン」と言われるのは、3品くらいでしょう。食欲をそそる豪華な前菜、メインディッシュ、特製のデザートです。それらの間には、「メイン」の料理をつなぐ「マイナー」な料理が出て来ます。ただ、誤解してはいけないのは、それらの料理も「メイン」と同じ質を持っていなければならないという事です。コースのうちに、1つでも2つでもまずい料理があったら、そのコース料理全体が完璧な思い出とはなり得ないのです。

マジックのパフォーマンスもまったく同じことで、最初に客の心を掴むオープナー、強力なミドルエフェクト、記憶に残るフィナーレで構成され、その間に「メインエフェクト」をつなぐ「マイナーエフェクト」が配されます。しかし、それら「マイナーエフェクト」も「メインエフェクト」ほどの派手さや複雑さは無いにしても、ショーの好印象を保つために質的に「手抜き」は出来ないのです。むしろ「マイナーエフェクト」の方が観客とのコミュニケーションが良く取れる場合も多いのです。

ポルトガルの詩人 Fernando Pessoa（1888～1935）が言ったように、「満月は大きな海にも映るが、小さな水たまりにも映る」のです。

あなたとあなたの客達のために、私のこの「小粒な」トリックを紹介したいと思います。

（現象）

「すべてのデッキには、すべてのトリックの成功を保証する「ギャランティーカード」が入っています」と言います。その言葉を証明するかのように、「ギャランティーカード」が自由に選ばれた客のカードを当ててしまうのです。

（このトリックの背景）

この興味深いトリックの成功を保証する不思議な「数理原理」は、おそらく Alex Elmsley が考案したか、研究したものだと思います。彼は「WEIGHT」というトリックにその原理を使いました。その後、私の良き友人であるシカゴ在住の Dave Solomon がその原理を使ったトリックを2011年に発表しました。それらとこのトリックを比べてみると興味深いと思いますし、また新たなアイデアも浮かぶかもしれません。

「BICYCLE」ブランドでは、144頁図1のように3枚目のジョーカーとして「ギャランティーカード」が入っているか、2枚目のジョーカーに「ギャランティー」の文言が書かれています。

（やり方）

—以下省略—